

英語学習における ICT 機器の活用

～プレゼンテーションソフトを活用した実践～

尾花沢市立尾花沢中学校 高橋 稔

<研究の概要>

本研究では、英語学習における ICT 機器、特にプレゼンテーションソフトの有用性について考察した。尾花沢中学校の実態をふまえ、英語学習の理解と定着を強化することがねらいで、実践した内容としては、①課題や資料をプレゼンテーションソフトを使って写真やイラストと共に提示②生徒のスピーチを、プレゼンテーションソフトを使って写真などと一緒に発表させたりした。その結果、生徒の意欲が一段と高まり、音声だけ、ハンドアウトだけといった従来の英語学習よりも生徒の理解度が上がった。また鉛筆書きで行っていた英作文だと、なかなか筆が進まなかった生徒が、キーボード入力だと積極的に取り組む様子が見られ、効果の高さを確認できた。ただし、写真だけを見て理解できるため、英文をしっかりと聞かせ、きちんと読ませる手立てのほか、キーボード入力だけでなくきちんと鉛筆で書かせる復習も必要であることが分かった。

1 研究テーマ設定の理由

本年度の研究テーマとして、昨年に引き続き、プレゼンテーションソフトを活用した実践について研究した。最近の講演会などでは、コンピュータのプレゼンテーションソフトを使い、スクリーンなどにスライドや写真などを提示して講演を行うことが多い。生徒にとっては、口頭のみで行う講演よりも、またハンドアウト資料だけの発表よりも、「いま話している内容」についての理解度がずっと深まり、文字の大きさや色を調整して注目を集める効果もある。

この特性を英語学習における、発表資料を作る際の英作文（書く活動）、発表する際の、音声面での練習（話す活動）、発表を聞くこと（聞く活動）、画面やスクリーンを見て、内容を読み取る（読む活動）などの場面で、英語の4技能すべてを磨き、総合的に学習効果を高めることができると考えた。

また尾花沢中学校第2学年の英語学力の現状として、「英語を聞く力」と「英語を書く力」の2つが、年度当初に行われた学力調査から課題であると分かった。これらの力をつけるために、①英語だけを聞かせるのではなく、視覚情報と音声情報をリンクさせて、「聞いて分かる」という実感を持たせる、②必要な情報を精選し、短い英文で最大の効果を発揮できるようにさせる、といった2つの面で、英語学習に対する自信を持たせ堂々と発表できる力をつけてあげたいと思い、本研究テーマを設定した。

2 研究の仮説

- (1) ICT 機器を活用し、視覚、聴覚の両面から資料や課題の提示を行えば、生徒の意欲が深まり、理解度と学力が高まるのではないかと。
- (2) 生徒による英作文などの発表でも、ICT 機器を使って発表させることによって、より理解しやすく、しっかりと定着する発表ができるのではないかと。

3 研究の方法と計画

仮説に基づき、以下の視点で研究を進めた。

(1) 仮説1について

- ① モデルの提示を ICT 機器（大型モニター、コンピュータ、プレゼンテーションソフト）を使って行い、生徒に学習の完成した姿を見せて見通しを持たせるとともに、生徒に ICT 機器の効果を体験させる。
- ② 英文だけでなく、イラストや写真をインターネット等を利用して取り込んで提示することで、理解を助けるだけでなく、疑問文の作り方と答え方など、動詞の動かし方についても視覚的に分かりやすくする。

(2) 仮説2について

- ① 英作文や音読のほかにも、生徒がコンピュータの操作やスライドの作成を、自力ででき

るまで指導する。

- ② プレゼンテーションソフトの操作を生徒自身にさせることにより、発表の際の視線のむけ方、声の大きさ、読むスピードなど、プレゼンテーションに必要なスキルをトータルで身につけさせる。
- ③ グループでスライド作成と発表をさせ、互いに英作文とコンピュータ操作などの教え合い学習をさせる。

4 研究の実践

(1) 実践1

①実践の概要

本単元では、新しく尾花沢市に来られたALTの先生による英語での自己紹介を聞いて、彼の出身地や好きなスポーツなど、リスニングをさせた後で、答えの確認として大型テレビとプレゼンテーションソフトを使って、写真や英文を活用し、英語で確認した。

②仮説について

ア仮説1について

英語のリスニング活動の一環として大型テレビを使用し、答え合わせを行ったところ、写真と英文を見ることで、理解が格段に高まるのではないかと考えた。また、プレゼンテーションソフトを使用し、写真と英文を提示し、「英語で聞いて英語で確認」という手順に変えることで、「できるだけ教師の英語使用量を多くし、英語と日本語が混在する説明から、英語のみによる授業をすすめることが、学習効果を上げることにつながるのではないかと考えた。

③子供の学びの姿

リスニングの内容を、写真と英文で提示したことで、提示した画像と文字を目で見て確認する姿が見られ、生徒の理解が高まったことが、学習の様子からも分かった。

また、英語で聞いた内容を英語で確認することは、英語学習の観点から見ると、大きな意味がある。学習のリズムを変えず、英語の授業を英語で進めることは、生徒の理解度を高める重要な学習スタイルである。

He



Mr. Kent
Reister

He likes... to ride a bike!



(2) 実践2

①実践の概要

本単元は、**There is ~. There are ~.**の英文を、疑問文に書きかえる方法と、それに対する答え方を学習する単元である。前時に学習した**There is ~.**の英文を確認し、そのあとでプレゼンテーションソフトのアニメーション効果を使い、「be 動詞を主語の前に移動する」という手順を視覚的に見せることで定着をねらった。また前時の確認の際、「英文を見て読む」だけでなく、「写真を見て、その場면을英語で話す」ことができるようになることをねらった。



ターゲットセンテンスを提示するときの様子

②仮説について

ア仮説1について

「～に〇〇がある」という意味の英文を指導していく際、日本語を理解したうえで英文を聞かせたり読ませたりすることはたいへん重要であるが、「絵を見て、その場면을英語で表現する」ことができるようになるのは、英語を使いこなすうえで大切な力である。

また、疑問文の作り方を言葉で説明するだけでなく、実際の動き(アニメーション)として見せることで、生徒の印象に強く残り、学習内容の定着につながるのではないかと考えた。

③子供の学びの姿

前時の復習として、写真を見て“**There is** ~.”の英文を話す活動では、写真の内容を認識するまで若干の時間がかかりながらも、正しく英語で話すことができていた。

また、疑問文の作り方では、**be** 動詞を動かすアニメーション効果を見て、「1年生の時に習ったことと同じだ。」というつぶやきが聞こえてきた。英語の学習ではよく見られる、“**He is** ~.”の疑問文や、“**You can** ~.”の疑問文の作り方と同様なので、既習事項と関連づけて考えることができた生徒が多かった。

答え方は

Are there ~?

で聞いているので

Yes, there are.

提示したスライドの一部

(3) 実践3

①実践の概要

本単元では、夏休みの間に行った場所や、そこで体験したことについて、一貫した内容の英文を書き、大型テレビとプレゼンテーションソフトで紹介する学習を行った。

まずは、教師によるモデル提示を行い、学習の見通しを持てるようにした。そして、教科書のモデル文を読んで内容を把握し、必要な語句の指導を行ったうえで、生徒にコンピュータで英作文とスライド作成を同時に行わせ、最終的にスライドショーと音読による発表を全員が行った。



教師によるモデルの提示

②仮説について

ア仮説1について

自分が行った場所やそこで体験したことについて、インターネットで写真などを集め、英文とともに提示させた。他の生徒の発表をしっかりと見ることによって、理解することができるのではないかと考えた。また、写真によって、体験したことを分かりやすく提示することができ、関心を高めることができるのではないかと考えた。

イ仮説2について

英作文を苦手とする生徒も、キーボード入力だと意欲を持ってスライドを作成することができるのではないかと考えた。生徒同士が教え合う学習形態を工夫することで、英作文だけでなく、コンピュータ操作につ

いてなど、互いに教え合うことができるようにした。



スライド作成の様子

③子供の学びの姿

英作文、スライド作成のほかに、他生徒の発表を見る場面があったが、意欲を持って発表を聞く様子が見られた。また、スライド作成と発表が、学力につながっていないのではないかという反省を生かし、復習の英作文をさせた。その結果、より定着する様子が見られた。ただし、声の大きさやスペルミスなど、課題も多く見られたので、英語学習的指導と発表の仕方についての指導、コンピュータ操作に関する指導など継続して行っていく必要がある。

また、went to～と want to～を混同して入力していたり、“I want to go to there again.”と、文法上必要ない語があったりと、英語学習指導が足らなかったところが多々あったのは、大きな反省点である。スライド作成と発表だけでなく、英語の指導にも十分に時間をかけていかねばならないと強く感じた。



発表の様子

(4) 実践 4

①実践の概要

修学旅行の思い出を、修学旅行グループでひとつのスライドを作成して発表した。行った場所と、そこで体験したことなどを英作文し、写真とともにスライドに作成し発表した。その際、一部の生徒に負担がかかるのを避けるため、1日目担当者、2日目担当者、3日目担当者として役割分担を明確にした。英作文からスライドショー作成、発表までを責任を持って取り組ませることで、しっかり記憶と学力として残るようにさせた。



スライド作成の様子

②仮説について

ア仮説1について

ICT機器を活用することで、今までワークシートで英作文することに抵抗があった生徒にも、やる気を起こさせ、また他生徒の発表も理解しやすく、意欲が高まるのではないかと考えた。

そのために、修学旅行の記念写真や、インターネットで収集した資料を活用し、スライドショーとしての見やすさなどを考えさせた。また、写真だけでなく、しっかり英文を聞かせ、内容を考えさせるために、英文だけの画面と写真の画面を別々に用意させ、しっかり英語を見て、聞いて、内容理解に努めさせた。

イ仮説2について

ワークシートと音読によるリスニングだ

けでは理解が難しかった生徒にも、英文が目の前に読めるような状態で提示されることで、音声と英文を結びつけることが容易になり、理解しやすくなるのではないかと考えた。

そのために、英作文のほかに、スライドショーで見せるための、ポイントを絞った英文の書き方や、口頭での追加情報などを考えさせ、より内容について考察し、内容の濃い、レベルの高い発表をさせるようにした。

③子供の学びの姿

他のグループの発表を聞く様子が、大変意欲的で、またしっかり内容を理解しているのが分かった。そして前回の反省（写真と英文が両方あるスライドでは、写真だけを見て英文を読まなくなる）を生かし、英文だけのスライドと、写真だけのスライドに分け、「しっかり読ませるスライド」と「写真を見せるスライド」に分けた。またすべての班のスライドの設定を同じようにしたため、自分の班と比べて読むことができ、英語を「聞く」「読む」活動にできたのではと思う。

グループ活動においては、生徒同士の活発な教え合い活動が見られた。教え合いの中身は、英作文の内容からコンピュータの使い方、発表の際のアドバイスなど多岐にわたり、英語が得意な生徒にとっては自分の学習の振り返りになり、苦手な生徒にとっては英語での発表に意欲的に取り組むことにつながった。

今回のスライド作成に当たり、今までと大きく異なる点は、グループでの学習だということと、使用する写真が、自分たちが撮ってきた写真を活用しているという点である。インターネットで写真やイラストを集めて活用した前回と異なり、自分たちが実際に行って体験した、東京スカイツリーや浅草仲見世などでの記念写真を活用することは、生徒の意欲を喚起するだけでなく、「東京スカイツリーで美しい景色を楽しんだ」「浅草で買い物を楽しんだ」といった、

実際に体験した内容を英文で表現するのに大いに役に立った。

また、最後に、発表の様子を動画で見直して、声の大きさ、発表する際の視線やスライドを進める時のスピード、ジェスチャーなどを振り返り、より良い発表につなげるための参考とした。

反省点は、互いの評価をする際、「声の大きさ」「分かりやすさ」といった、プレゼンテーション面での評価ばかりになってしまい、「英語の発音・アクセント」「正しい語句と文法表現」といった、英語学習としての評価が抜けてしまったところである。プレゼンテーションとしての完成度を上げようとするあまり、肝心の英語学習のポイントがずれた授業になってしまったのは大いに反省すべき点であった。



練習の様子



グループ発表の様子



グループで発表する様子



完成したスライド



完成したスライド

5 成果と課題

【成果】

〔仮説1〕について

英語学習の観点から、音声だけでなく視覚情報からも英文を紹介すると、大いに意欲を喚起することができ、理解と定着につながった。

大画面テレビとプレゼンテーションソフトを使用すれば、「聞く活動」のほかに、「読む活動」を一斉に行う際、生徒の視線を集めたり、ポイントを説明したりする際に大変便利である。生徒の意識を一点に集めることができる。

〔仮説2〕について

前年の反省（コンピュータ操作は上達したが英語の学力が上がっていない）を生かし、ICT機器を活用することと「書く」「話す」などの言語活動を組み合わせることで、確かな学力を高めることができた。

たとえば、スライド作成で使った英語をノートに書いたり話したりさせるなどして復習させた結果、英作文の定着がよくなった。

【課題】

〔仮説1〕について

・写真を見ただけで内容が分かってしまうので、プレゼンテーションを見るだけでなく、「耳だけで聞かせる英語学習活動」が必須である。でないと、「英語を聞いて正しく理解し、絵や文章に合ったものを選ぶ」というような、受験に必要な力がつかない。

・スライドの英語を、「見る」のではなく、「読ませる」必要性を強く感じた。絵や写真が多用され、たいへん分かりやすいが、きちんと「英文を読む力」をつけないと、学力がついたことにはならない。

〔仮説2〕について

・「プレゼンテーション」という形にこだわりすぎた感がある。最終的に生徒にとって必要な力は、「英語を使う力」なので、プレゼンテーション以外にも、英語を「読む」「聞く」「書く」「話す」練習が必須である。また英語はコミュニケーションの手段なので、互いに英語でやり取りをする活動や練習のためのツールとして、もっと研究していく必要がある。

・キーボード入力では、鉛筆で書く時よりもスペルミスが目立った。生徒にとって必要なのは鉛筆で正しく書けるようになることであることを常に念頭に置いて指導を進める必要がある。

・分かりやすい発表をすることに主観を置いたせいで、正しい発音とアクセント、正確なスペルと文法など、英語学習として大事なポイントを疎かにしてしまった。また原稿を見ながら発表する生徒に、暗記したり身振り手振りを交えるなど、コミュニケーションスキルの向上を図る指導が必要だった。

最後に、2年間の研究で、ICT機器の有用性を理解し、たくさん勉強することができた。まだまだ、電子黒板やデジタル教科書など、学ぶべき教材がたくさんあるが、これからの英語学習に生かすためにも、ICT機器を、活用し続け研究していきたいと思う。